

書評 『京都大学百二十五年史 通史編』 を読んで

吉川卓治 †

はじめに

京都大学大学文書館の西山伸氏から本書の書評についてお声がけいただいたのは、夏前のことだったろうか。大学史・高等教育史に関心をもつ者にとってたいへん貴重な機会であるから、二つ返事で引き受けさせていただいた。内容の要約は記す必要はないとのことだったので、以下では初めに、いささか外形的なものにとどまるが、本書の特色についてまとめ、その後で内容に関して感想を付しつつコメントを提示したい。

1 本書の特色

本書は近年、各大学で作られてきた個別大学史(沿革史)のなかでは際立った特色をもつものとなっている。

第一はその編纂方式である。本書は、京都大学大学文書館に長く所属し、百二十五年史編集室長を務めた西山伸氏が一人で執筆した草稿を創立百二十五周年記念事業委員会の下に置かれた編集委員会の委員が査読し承認するという手続きをとったという(451ページ)。日本の個別大学史は1960年代までは個人が執筆することが多かったが、1970年代以降は執筆者数が増え、編纂組織の規模が大きくなる傾向にあるといわれる⁽¹⁾。一人で個別大学史を執筆することが多いとされてきた海外、例えばドイツでも一人で全体を書くのは不可能だ

から多くの研究者が協力する体制が不可欠だとの認識が生まれつつあるとすでに20世紀の終わりに指摘されている⁽²⁾。本書の編纂方式はそうした趨勢への挑戦でもある。複数の担当者が執筆すると、専門性が深まる反面、調整を図ったとしても関心の所在や文体・言葉遣いの違いから、どうしても全体の統一感が損なわれてしまう。だが、本書ではそのようなことはまったくなく、安心して読むことができる。

第二に記述対象を創立(1897年6月)から2021年3月までの125年間の「京都大学」、すなわち京都帝国大学→京都大学→国立大学法人京都大学に限定したことである。京都帝国大学にはいわゆる前身学校はないけれども、1947年5月31日公布の国立学校設置法(法律第150号)により旧制の京都大学および附属医学専門部とともに第三高等学校が包括されて新制の京都大学になったのだから、第三高等学校について記述することはありうる。むしろ個別大学史では、創設者の生い立ちから筆が起こされたり、すべての包括学校の歩みが記述されたりすることの方が一般的のように思われる。だが、本書は潔く第三高等学校史を割愛している。

1998年に刊行された『京都大学百年史 総説編』は、本書の著者(西山)も指摘するように、明治2年(1869)の舎密局創立から記述を始め、第三

† 名古屋大学教育発達科学研究科教授

高等学校が1897年に京都帝国大学に土地を譲って移転するまでを一つの章全体で100ページほどを充てているにもかかわらず、その後の第三高等学校については記述を基本的に欠いたまま（ただし第1編第8章「京都大学キャンパスと建築の百年」では取り上げられている）、戦後改革期に再登場させるというものだった⁽³⁾。このバランスの悪さを克服するには、まったく記さないか、あるいは第三高等学校についても包括学校として位置づけ全体的に扱うかのいずれかになるだろう。第三高等学校に関心をもつ人も少なくないと思われるし、その資料群を見れば後者の選択もあり得たのではないかと思う。

第三は、法令公布日を始め、大学内外の諸機関でなされた意志決定の日、学内規程の制定日、会議開催日など、可能な限り日付を特定し記載していることである。歴史学であれば当然の手続きなのかもしれないが、個別大学史では年月までの記載はあっても日付が省略されることは案外多いように思う。日付の確認にはかなり神経を使ったと思われるが、今後、京都大学の歴史を正確に知りたい人にとって本書はレファレンスにしっかりと耐えるものになっていると評価できる。ただ、やや年表風になってしまったところも見受けられ、そのあたりは味気なく感じられた。

2 若干のコメント

(1) 「大学の門戸開放」について

上で述べた評価と矛盾するようにみえるかもしれないが、内容に注目するならば、本書は、個別大学史としてはある意味でオーソドックスな路線を継承したという印象をもった。それは政策、制度・組織、学生生活、主要な事件を柱とする構成を採用したことからきている（このことは後述したい）。その分、それ以外の部分に踏み込むことはかなり抑制されている。

かつての『京都大学百年史』の編集方針には、「い

わゆる大学の門戸開放」についても「さまざまな角度から言及する」ことが含まれており、「たとえば選科生、聴講生、女子学生入学、外国人留学生、学外者を対象にした各種の公開講座などを手掛かりにしながら考察する」ことも目指したという⁽⁴⁾。実際『京都大学百年史 資料編』には各年の「分科大学・学部在学者」の表に学生だけでなく「生徒（旧制）」が、「分科大学・学部入学志願者・入学者」の統計にも「生徒（旧制）」の全学合計と分科大学ごとの人数が示されている（ただし「生徒」が何を意味するのかは説明がない）。また『京都大学百年史 総説』では散発的にはあるが選科生について記述している。

これに対して本書は「門戸開放」については意識的に取り上げていない印象である。本書で語られている「学生」は基本的にいわゆる本科の学生である。各時期の概要を示す部分に掲げられた入学者数の表も本科の学生に限定され、選科生に触れることはあまりない。第1編第2章の校友会に関する記述に、選科生は「学生」と並んで「正会員」だったと出てくるが（73ページ）、選科生とは何か、「学生」とはどう違うのか、ここでは説明がない。第3章の学生生活のところで「女子生徒」の入学にかかわって若干触れているので、それなら前の方で記述した方がよかったのではないかと思う。

女性がほとんど登場しない点も気になった。もちろん、第2編第1章にある「戦後高等教育改革」の節には「女子学生入学」の項目が設けられ、1946年度に入学した女子学生の入学直前の学歴が示されるなど、無視しているわけではない（205～206ページ）。だが、人名索引による限り本書には388人が登場するが、そのうち女性は4人（うち京大の教職員・学生は2人）にとどまっている。戦後に半分以上のページを割いているのだからもう少し多く女性の固有名詞が出てきてもよかったように思われるのだが、このこと自体が京都大学の特性を表しているのだろうか。

いずれにしても今日、社会貢献や多様化が大学の課題として注目される時代を迎えており、本書にも「大学開放」についてももう少し記述があってよかつたのではないかと。

(2) 「大学基準」について

本書では第2編第1章第1節で大学基準協会と「大学基準」が扱われている。やや細かなことになるが、興味深いのは1947年12月15日の大学基準協会総会で改訂した「大学基準」が示され、そこから授業科目が引用されていることである(209～210ページ)。これはこれまでの個別大学史とは一味違う点だと思われる。

「大学基準」はもともと、全国の大学の集まりである大学設置基準設定連合協議会が1947年7月7日に決定した「大学設置基準」を、翌8日に発足した大学基準協会が「大学基準」として承認したものである⁽⁵⁾。それ以降1947年12月15日、1948年5月25日、1949年5月24日、1950年6月13日、1951年6月21日、1953年6月9日、1954年6月22日と毎年のように改訂が繰り返された⁽⁶⁾。それぞれの改訂には意味があり、『大学基準協会十年史』は、「大学基準」は1951年6月改訂でもって「ようやく整備したと見ることができ」⁽⁷⁾と述べている。

1967年に刊行された『京都大学七十年史』には「大学基準」の内容について説明があるが、いつのものなのか判然としない⁽⁸⁾。『京都大学百年史 総説編』では「大学基準」についてあまり詳しく説明していないようだが、『京都大学百年史 資料編1』には1947年7月8日に承認されたものが採録されている⁽⁹⁾。他大学では『東京大学百年史 通史三』がやはり1947年7月8日承認の「大学基準」を用いて「一般教養科目」について説明し⁽¹⁰⁾、『東京大学百年史 資料編一』にはその「大学基準」が採録されている⁽¹¹⁾。

こうした中、本書はどのようにして1947年12月15日改訂の「大学基準」を使って「従来の大学になかっ

たものとして」の「一般教養科目」を説明したのだろうか(209ページ)。その理由が知りたいと思う。戦後高等教育改革における大学基準協会の役割や、協会による「一般教育」導入策の意義を示す場合には7月8日承認の「大学基準」を用いるのが妥当だと思われる。実際、上述のように『東京大学百年史』はそれを使って説明している。

これに対して本書は、1947年12月15日開催の大学基準協会総会で「最終決定」され「公表」されたことの意味を重視したようにみえる。つまり京都大学を含む新制大学に与えた影響を考慮したのだと。しかし、本書が引用しているように、1947年12月15日改訂の「大学基準」には人文科学、社会科学、自然科学の各系列に重複して同じ科目(教育学、歴史学、社会学、統計学)が含まれており、そこにはそれらの科目を「各大学が便宜と考える方の系列に属するものとして取扱つてよいのである」⁽¹²⁾という含意があった。この点が7月8日承認の「大学基準」とは異なる点である⁽¹³⁾。このことを踏まえるならば、「大学基準」を受けて京都大学が実際にどのような一般教育科目を用意したのか示される必要があつたのではないだろうか。

上記にかかわって、全体に京都大学での一般教育そのものについてももう少し踏み込んだ説明がなされてもよかつたのではないかとも思った。学生の大多数が在学年数の半分の時間をかけて受講してきたものであるし、今後その歴史的評価・総括をめぐって議論がなされていくと考えられるからである。

(3) 「通史」をどう構成するか

最後に本書の書評の範囲を超えるかもしれないが、やや大きな論点を提示したい。これまで個別大学史には、通史、部局史、資料(＋写真集)で編成されるものというある種の理念型があつたように思われる⁽¹⁴⁾。だが、今日考えればこの編成自体が、部局を学部、研究所、共同研究施設等に分

けて整理することが可能だった、法人化前の国立総合大学の法的基盤が支えた安定的な組織体制を前提にしたものだった。しかし、法人化以降、組織の改廃が目まぐるしく行なわれ、バーチャルな組織も「存在」するようになった。このため部局史そのものがすでに成り立たなくなっているように思われる。

『京都大学百二十五年史』は通史編と資料編を作るとの基本方針のもとで編集されたとされる(450ページ)。このことは、国立大学をめぐる今日の状況を反映したものだと思われる。しかし、通史と部局史という組み合わせは一つの大学の歴史を見渡すために考案されたものだったと考えられるから、部局史を欠くとすると、それと連動して通史も構成を組み替える必要が出てくるはずだし、少なくとも部局史が担っていた部分をどこかで補わなければならないのではないかと。

本書はすでに述べたようにオーソドックスな構成を採用したものとなっているが、「部局史なき後の通史」をどう構成するかは今後さらに検討の余地があるだろう。通史の構成には手を付けずに、別に学術編とか教育編、あるいは事件編などを組み合わせるといったような補完的な方法もありうるのかもしれない。いずれにしても、個別大学史の全体構成そのものを再考していくことが求められているのではないかとと思われる。

おわりに

京都大学125年の歴史をコンパクトにまとめるため、内容を限定しなければならず相当な苦勞があったのではないかと想像するものの、つい手前勝手なコメントになってしまった。だが本書は、特色ある編纂方式に挑戦しつつ、歴史学の基本に徹し、これまでの個別大学史が確立してきた構成を堅実に受け継ぐことで、高い信頼性をもつ成果となっているというのが総括的な評価である。

ところで、評者の勤務する名古屋大学が1939年の名古屋帝国大学創設以来、初めての「正史」として刊行したのは『名古屋大学五十年史』部局史(1989年)・通史(1995年)だった。そしておよそ30年ぶりに創立80周年・創基150周年(明治4年の仮医学校開設以来)等を記念する事業の一環として『名古屋大学の歴史 1871～2019』上・下(名古屋大学出版会、2022年3月)を刊行した。評者は縁あってこれら二つの編纂事業の一端にかかわってきた。そのためもあって、本書『京都大学百二十五年史 通史編』を読みながら、名古屋大学史との違いを意識してしまうことになった。

一方で、本書との共通性にも目が向いた。一つだけ述べれば、近年、電子媒体、とくにウェブサイトにて個別大学史を掲載する大学が増えている。たしかにウェブサイトなら入手しやすいし、たぶん多くの人に見てもらえる。コストもかからない。語彙や人物の検索がしやすいといったメリットもある。『名古屋大学の歴史 1871～2019』の編纂を全学の委員会で説明した際にもそうした声があった。だが、結局紙媒体での出版となった。『京都大学百二十五年史』は、資料編は電子媒体だが、通史編は紙媒体で刊行されている。評者としては、書物を手にとって読むという習慣(文化)から大学が自ら遠ざかってよいのかという思いもあって、紙媒体での刊行という判断を支持し、敬意を表したいと思う。

[註]

- (1) 湯川次義「大学沿革史の編纂体制」学校沿革史研究会『学校沿革史の研究 総説』野間教育研究所紀要第47集、2008年、216ページ。
- (2) 別府昭郎「ドイツにおける個別大学史叙述の歴史の変遷」寺崎昌男・別府昭郎・中野実編著『大学史をつくる—沿革史編纂必携』東信堂、1999年、95ページ。
- (3) 西山伸「国立大学Ⅰ」学校沿革史研究部会／寺崎昌男・西山伸・湯川次義『学校沿革史の研究

大学編2—大学類型別比較分析—』野間教育研究所紀要第58集、2016年、62～65ページ。

- (4) 京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史資料編3』京都大学後援会、2001年、1108～1109ページ。
- (5) 大学基準協会十年史編纂委員会編『大学基準協会十年史』大学基準協会、1957年、97ページ。
- (6) 同前、251～264ページ。
- (7) 同前、115ページ。
- (8) 京都大学七十年史編集委員会編『京都大学七十年史』京都大学、1967年、160ページ。
- (9) 京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史資料編1』京都大学後援会、1999年、19～23ページ。
- (10) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史通史三』東京大学、1986年、122ページ。
- (11) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史資料編一』東京大学、1984年、186～190ページ。
- (12) 佐々木重雄編『「大学基準」及びその解説 大学基準協会資料第二号』大学基準協会、1948年2月、14～15ページ。
- (13) 海後宗臣・寺崎昌男『大学教育 戦後日本の教育改革9』東京大学出版会、1969年、402ページ。
- (14) 寺崎昌男「日本における大学史研究の動向と課題—大学沿革史編纂を中心として—」前掲『大学史をつくる』72～73ページ。